

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどのごへんじ

四糸金吾殿御返事

せおうごしよ

（世雄御書）

新版
1585
〜
1591

しじようきんごどのごへんじ せおうごしよ

四条金吾殿御返事（世雄御書）

けんじ

ねん

がつ

がつ

さい

しじようきんご

建治 3 年（'77） 7 月または 8 月

56 歳

四条金吾

おんふみ

粗々

承

なが

よ

明

遠

みち

御文あらあらうけたまわつて、長き夜のあけ、とおき道を

帰

かえりたるがごとし。

そ

ぶつぼう

もう

しやうぶ

先

おうぼう

もう

しやうばつ

夫れ、仏法と申すは勝負をさきとし、王法と申すは賞罰

もと

ゆえ

ほとけ

せおう

ごう

おう

じさい

を本とせり。故に、仏をば世雄と号し、王をば自在となづ

けたり。

なか

てんじく

がっし

わくに

にほん

もう

中にも、天竺をば月氏という。我が国をば日本と申す。

いちえんぶだいはちまん

くに

なか

だい

くに

てんじく

しやう

くに

一閻浮提八万の国の中に、大なる国は天竺、小なる国は

にほん

な

いんどだいに

ふそうだいいち

ぶつぽう

日本なり。名のめでたきは、印度第二、扶桑第一なり。仏法

つき

くに

はじ

ひ

くに

留

つき

にし

は月の国より始まつて日の国にとどまるべし。月は西より

い

ひがし

む

ひ

ひがし

にし

い

てんねん

出でて東に向かい、日は東より西へ行くこと、天然の

理

じしやく

くろがね

かみなり

ぞうけ

たれ

ことわり、磁石と鉄と、雷と象華とのごとし。誰かこ

理

破

のことわりをやぶらん。

くに

ぶつぽう

ゆらい

尋

てんじんしちだい

ちじん

この国に仏法わたりし由来をたずぬれば、天神七代・地神

ごだい

にんのう

よ

だいいちじんむてんのう

ないし

五代すぎて人王の代となりて、第一神武天皇、乃至

だいさんじゅうだいきんめいてんのう

もう

おう

くらい

即

たま

第三十代欽明天皇と申せし王おわしき。位につかせ給い

さんじゅうにねんちせい

たま

だいじゅうさんねんみずのえさるじゅうがつじゅうさんにち

て三十二年治世し給いしに、第十三年壬申十月十三日

かのととり

くに

にし

ひやくさいこく

もう

くに

にほんこく

辛酉に、この国より西に百済国と申す国あり、日本国の

だいおう

ごちぎよう

くに

くに

だいおう

せいめいおう

もう

こくおう

大王の御知行の国なり。その国の大王・聖明王と申せし国王

ねんぐ

にほんこく

進

こんどう

しゃかぶつ

あり。年貢を日本国にまいらせしついでに、金銅の釈迦仏な

いっさいきよう

ほっし

あまとう

てんのうおお

らびに一切経・法師・尼等をわたしたりしかば、天皇大い

よろこ

ぐんしん

おお

せいばん

ほとけ

崇

たてまつ

に喜んで、群臣に仰せて「西蕃の仏をあがめ奉るべし

そがのおとど

稲

目

すくね

もう

ひと

せいばん

やいなや」。蘇我大臣いなめの宿禰と申せし人云わく「西蕃

しよこく

らい

豊

秋

日

本

ひと

そむ

の諸国みなこれを礼す。とよあきやまと、あに独り背かん

もう

もののべおお

連

尾

輿

なかとみの

鎌

子

とう

そう

や」と申す。物部大むらじおこし・中臣かまこ等、奏して

い

わ

こっか

てんか

くん

ひと

てんち

曰わく「我が国家、天下に君たる人は、つねに天地・

社 稷

ももやそがみ

はるなつあきふゆ

再 拝

じ

しやそく・百八十神を春夏秋冬にさいはいするを事とす。

いま

改

せいばん

かみ

はい

しかるを、今さらあらためて西蕃の神を拝せば、おそらく

わ くに

かみ 怒

うんぬん

とき

てんのう分

は我が国の神いかりをなさん」と云々。その時に天皇わか

ちよくせん

こころ

そがのおとど

ちがたくして勅宣す。「このことを、ただ心みに蘇我大臣

付

いちにん

崇

た

ひともち

につけて、一人にあがめさすべし。他の人用いることなか

そがのおとど受け

と

おお

よろこ

たま

しやかぶつ

れ」。蘇我大臣うけ取って大いに悦び給いて、この釈迦仏を

わ

こじゅう

小 墾 田

もう

い

あんち

我が居住のおわだと申すところに入れまいらせて安置せり。

もののべのおおむらじ

ふ し ぎ

憤

にほん

物部大連、「不思議なり」とていきどおりしほどに、日本

こく

だいえきびよう起

し

ものたいはん

およ

くにたみつ

国に大疫病おこりて死せる者大半に及ぶ。すでに国民尽き

もののべのおおむらじ

すき

え

ほとけ

うしな

ぬべかりしかば、物部大連、隙を得て、この仏を失う

由 もう

ちよくせん成

はや

たこく

ぶつぼう

す

べきよし申せしかば、勅宣なる。「早く他国の仏法を棄つ

うんぬん

もののべのおおむらじ

おんつか

ほとけ

と

すみ

べし」云々。物部大連、御使いとして仏をば取つて炭を

熾

槌

う

碎

ぶつでん

ひ

掛

もつておこし、つちをもつて打ちくだき、仏殿をば火をかけ

焼

払

そうに

答

加

とき

てん

くも無

てやきはらい、僧尼をばむちをくわう。その時、天に雲なく

おおかぜ吹

あめ降

だいりてんか

焼

上

だいおう

して大風ふき、雨ふり、内裏天火にやけあがつて、大王な

もののべのおおむらじ

そがのおみ

さんにんとも

えきびよう

切

らびに物部大連、蘇我臣、三人共に疫病あり。きるがご

焼

おおむらじ

つい

いのちた

そが

おう

とく、やくがごとし。大連は終に寿絶えぬ。蘇我と王と

辛

そせい

ぶつぼう

もち

はからくして蘇生す。しかれども、仏法を用いることなく

じゅうくねん

して十九年すぎぬ。

だいさんじゅういちだい びだつてんのう きんめいだいに たいし みよじゅうしねん

第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子、治十四年なり。

そう りようしん ひと もののべのおおむらじ こ ゆげのもりや ちち

左右の両臣は、一りは物部大連が子にて弓削守屋、父の

続 おおむらじ にん そがのすくね こ そがのうまこ うんぬん

あとをついで大連に任ず。蘇我宿禰の子は蘇我馬子と云々。

おう みよ しょうとくたいしう たま ようめい みこ びだつ

この王の御代に聖徳太子生まれ給えり。用明の御子、敏達の

甥 おんとしにさい にがつ ひがし む おんしやりたのころにほん

おいなり。御年二歳の二月、東に向かつて無名の指を開い

なむぶつ とな たま おんしやりたのころにほん

て「南無仏」と唱え給えば、御舍利 掌 にあり。これ日本

こく しゃかねんぶつ はじ

国の釈迦念仏の始めなり。

たいしはっさい はっさい たいしい さいごく しょうにん

太子八歳なりしに、八歳の太子云わく「西国の聖人・

しやかむにぶつ ゆいぞう まっせ たつと すなわ わざわ け

釈迦牟尼仏の遺像、末世にこれを尊べば、則ち禍いを消

ふく こうむ あなど すなわ わざわ まね いのち ちぢ

し福を蒙る。これを蔑れば、則ち災いを招き寿を縮む」

とううんぬん おおむらじもののべ ゆげのすくね もりやとう 怒 い そ

等云々。大連物部の弓削宿禰の守屋等いかりて云わく「蘇

が ちよくせん そむ たこく かみ らい とううんぬん えきびよう

我は勅宣を背いて他国の神を礼す」等云々。また疫病い

や じんみん 絶 ゆげのもりや

まだ息まず、人民すでにたえぬべし。弓削守屋、またこれ

かんそう うんぬん ちよくせん い そがのうまこ ぶつぼう こうぎよう

を間奏す云々。勅宣に云わく「蘇我馬子、仏法を興行す。

ぶつぼう しりぞ とううんぬん もりや なかとみのおみ

よろしく仏法を却くべし」等云々。ここに守屋と中臣臣・

かつみのおおむらじとう りようしん てら む どうとう き 倒

勝海大連等の両臣とは、寺に向かつて、堂塔を切りたおし、

ぶつぞう 焼 壊 てら ひ 放 そうに けさ 剥

仏像をやきやぶり、寺には火をはなち、僧尼の袈裟をはぎ、

むち

責

てんのう

もりや

うまことうえきびよう

答をもつてせむ。また天皇ならびに守屋・馬子等疫病す。

ことば い

や

切

かさ起

その言に云わく「焼くがごとし、きるがごとし」。また瘡お

瘡 瘡

うまこなげ

い

さんぼう

あお

こる。ほうそうという。馬子歎いて云わく「なお三宝を仰が

ちよくせん

い

なんじひと

おこな

よにん

た

ん」。勅宣に云わく「汝独り行え。ただし、余人を断て

とううんぬん

うまこきんえつ

しょうじゃ

つく

さんぼう

あが

てんのう

よ」等云々。馬子欣悦し、精舎を造つて三宝を崇めぬ。天皇

つい

はちがつじゅうごにち

ほうぎょうんぬん

とし

たいし

じゅうし

は終に八月十五日、崩御云々。この年は太子は十四なり。

だいさんじゅうにだいようめいてんのう

みよにねん

きんめい

たいし

しょうとくたいし

ちち

第三十二代用明天皇、治二年、欽明の太子、聖徳太子の父

みよにねんひのとひつじしがつ

てんのうえきびよう

みかどちよく

い

なり。治二年丁未四月に天皇疫病あり。皇勅して云わ

さんぼう

き

ほつ

うんぬん

そがのおとど

みことのり

したが

く「三宝に帰せんと欲す」云々。蘇我大臣、詔に随う

べしとて、ほっし ひ だいいり いついに法師を引いて内裏に入る。とよのくに ほっし豊国の法師こ

れなり。もののべのもりやおおむらじとう おお いか よこ なら い物部守屋大連等、大いに瞋り、横に睨んで云わく

「天皇を厭魅す」と。てんのう えんみ つい みかどかく たも ごがつ ものべのもりや終に皇隠れさせ給う。五月に物部守屋

が一族、いちぞく しぶかわ いえ 引 籠 たぜい 集 たいし うまこ洩河の家_おにひきこもり多勢をあつめぬ。太子と馬子

と押し寄せてたたかう。お よ ごがつろくがつしちがつ あいだ し かどうかっせん五月六月七月の間に四箇度合戦す。

三度は太子まけ給う。さんど たいし 負 たも だいしど目 たいし がん た い第四度めに太子、願を立てて云わく

「釈迦如来の御舍利の塔を立て、しやかによらい おんしやり とう た してんのうじ こんりゆう四天王寺を建立せん」と。

馬子、願じて云わく「百濟より渡すところの釈迦仏を寺を

立てて崇重すべし」と云々。うまこ がん い ひやくさい わた しゃかぶつ てら弓削、た すうちよう うんぬん ゆげ 名乗 いなのつて云わく「これ

は我が放つ矢にはあらず。我が先祖崇重の府都大明神の

はな はな たも や 放ち給う矢なり」と。この矢はるかに飛んで太子の鎧に中

放ち給う矢なり」と。この矢はるかに飛んで太子の鎧に中

たいし名乗

わ はな や

してんのう

る。太子なる。これは我が放つ矢にはあらず。四天王の

はな はな たも や 放ち給う矢なり」ととて、迹見赤禰と申す舍人にいさせ給え

とみのいちい もう とねり 射

たま

放ち給う矢なり」ととて、迹見赤禰と申す舍人にいさせ給え

や と

もりや むね あた

秦 河 勝

ば、矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ。はたのかわかつ、

落 合 おちあいて頸をとる。この合戦は用明崩御、崇峻いまだ位

かつせん ようめいほうぎよ すしゆん

おちあいて頸をとる。この合戦は用明崩御、崇峻いまだ位

っ たま

ちゆうかん

に即き給わざる、その中間なり。

だいさんじゆうさんすしゆんてんのう

くらい 即 たも

たいし してんのうじ

第三十三崇峻天皇、位につき給う。太子は四天王寺を

こんりゆう

しやかによらい おんしやり

うまこ げんごうじ もう

建立す。これ釈迦如来の御舍利なり。馬子は元興寺と申す

てら　　こんりゆう

ひやくさいこく

渡

そうら

きようしゆしやくそん

寺を建立して百済国よりわたりて候いし教主釈尊を

すうちよう

いま

よ

せけんだいいち

ふしぎ

ぜんこうじ

あみだ

崇重す。今の代に世間第一の不思議は、善光寺の阿弥陀

によらい

おうわく

しやかぶつ

怨

如来という誑惑これなり。また釈迦仏にあだをなせしゆえ

さんだい

てんのう

もののべ

いちぞく

虚

に、三代の天皇ならびに物部の一族むなしくなりしなり。

たいし

きようしゆしやくそん

ぞういつたい

造

たま

げんこうじ

こ

また太子、教主釈尊の像一体つくらせ給いて元興寺に居

いま

たちばなでら

ごほんぞん

にほんこく

せしむ。今の橘寺の御本尊これなり。これこそ日本国に

しやかぶつ

初

釈迦仏つくりしはじめなれ。

かんど

ごかん

だいに

めいてい

えいへいしちねん

こんじん

ゆめ

み

漢土には後漢の第二の明帝、永平七年に金神の夢を見て、

はかせ

さいいん

おうじゆんとう

じゆうはちにん

がつし

遣

ぶつぼう

博士の蔡愔・王遵等の十八人を月氏につかわして仏法を

たず たま ちゅうてんじく しょうにん まとうが じくほうらん もう

尋ねさせ給いしかば、中天竺の聖人の摩騰迦・竺法蘭と申

ににん しょうにん どうえいへいじゅうねんひのとうのとしむか と すうちょう

せし二人の聖人を同永平十年丁卯歳迎え取つて崇重あ

かんど もと みかど おん 祈 じゆか どうか

りしかば、漢土にて本より皇の御いのりせし儒家・道家の

ひとびとすうせんにん 嫉 訴 どうえいへい

人々数千人、このことをそねみてうつたえしかば、同永平

じゅうしねんしょうがつじゅうごにち め あ かんどう どうし

十四年正月十五日に召し合わせられしかば、漢土の道士

よろこ とうど かみひやくれい ほんぞん ににん

悦びをなして唐土の神百霊を本尊としてありき。二人の

しょうにん ほとけ おんしやり しゃかぶつ えぞう ごぶ きよう ほんぞん

聖人は仏の御舍利と釈迦仏の画像と五部の経を本尊と

たの たも どうし もと おう まえ なら

侍怙み給う。道士は本より、王の前にして、習いたりし

せんきよう さんぷんごてん にせいさんおう しょ たきぎ 積 込 焼

仙經・三墳五典・二聖三王の書を薪につみこめてやきし

いにしえ

焼

灰

さき

みず

浮

かば、古はやけざりしがはいとなりぬ。先には水にうか

みず

しず

きじん

よ

きた

恥

びしが水に沈みぬ。鬼神を呼びしも来らず。あまりのはず

ちよぜんしん

ひしゆくさい

もう

どうしとう

思

じ

かしさに、褚善信・費叔才なんど申せし道士等はおもい死に

死

ににん

しょうにん

せつぼう

しやり

てん

のぼ

にししぬ。二人の聖人の説法ありしかば、舍利は天に登つ

ひかり

はな

にちりん見

えぞう

しやかぶつ

みけん

て光を放つて日輪みゆることなし。画像の釈迦仏は眉間よ

ひかり

はな

たも

りよけいつうとう

ろつびやくよにん

どうし

きぶく

り光を放ち給う。呂慧通等の六百余人の道士は帰伏して

しゆつけ

さんじゅうにち

あいだ

じゅうじた

出家す。三十日が間に十寺立ちぬ。

しやかぶつ

しょうばつ

正

ほとけ

かみ

あ

さんだい

されば、釈迦仏は賞罰ただしき仏なり。上に挙ぐる三代

みかど

ににん

しんか

しやかによらい

かたき

たま

の帝ならびに二人の臣下、釈迦如来の敵とならせ給いて、

こんじよう　むな　ごしよう　あくどう　お
今生は空しく後生は悪道に堕ちぬ。

いま　よ

変

かんど　どうし　しん　ひ

今の代もまたこれにかわるべからず。漢土の道士、信・費

にほん

もりやとう

かんど

にほん

だいしよう

じんぎ

しんよう

等、日本の守屋等は、漢土・日本の大小の神祇を信用して

きようしゅしやくそん

おんかたき

かみ

ほとけ

したが

たてまつ

教主釈尊の御敵となりしかば、神は仏に随い奉り、

ぎようじや

みな　滅

いま　よ

かみ

あ

行者は皆ほろびぬ。今の代もかくのごとし。上に挙ぐると

ひやくさいこく

ほとけ

きようしゅしやくそん

な

あみだぶつ

い

ころの百済国の仏は教主釈尊なり。名を阿弥陀仏と云

にほんこく

誑

しやくそん

たぶつ

替

かみ

つて、日本国をたばらかして釈尊を他仏にかえたり。神と

ほとけ

ほとけ

ほとけ

さべつ

しやくそん

捨

こころ

仏と、仏と仏との差別こそあれども、釈尊をすすめる心

いち

いま

よ

めつ

うたが

はただ一なり。されば、今の代の滅せんこと、また疑いな

かるべし。これはいまだ申さざる法門なり。秘すべし、秘すべし。

また吾が一門の人々の中にも、信心もうすく、日蓮が申す

ことを背き給わば、蘇我がごとくなるべし。その故は、仏法

日本に立ちしことは、蘇我宿禰と馬子との父子二人の故ぞ

かし。釈迦如来の出世の時の梵王・帝釈のごとくにてこそ

あらましなれども、物部と守屋とを失いし故にただ一門に

なりて、位もあがり国をも知行し一門も繁昌せし故に、高

挙がりをなして崇峻天皇を失いたてまつり、王子を多く殺

けつく たいし み ここにじゆうさんにん うまこ 孫 いるか しんかうしな

し、結句は太子の御子二十三人を馬子がまご入鹿の臣下失

ゆえ こうぎよくてんのう なかとみのかまこ はか

いまいらせし故に、皇極天皇は中臣鎌子が計らいとして、

きようしゆしやくそん つく たてまつ もう

教主釈尊を造り奉つてあながちに申せしかば、入鹿の

おみ ちちとう いちぞく いちじ ほぼ

臣ならびに父等の一族、一時に滅びぬ。

ごすいさつ わ いちもん なか

これをもつて御推察あるべし。また我がこの一門の中に

もう 通 たま ひとびと とが

も申しとおらせ給わざらん人々は、かえりて失あるべし。

にちれん 恨 たも しょうぼう のとぼうとう ごらん

日蓮をうらみさせ給うな。少輔房・能登房等を御覧あるべ

し。

構 あいだ 余

かまえて、かまえて、この間はよのことなりとも御起請

ごきしょう

書

たも

かかせ給うべからず。

ひ

火はおびただしきようなれども、し

湿

みず

鈍

そう

ばらくあればしめる。

水はのろきようなれども、左右なく

うしな

ごへん

はら悪

ひと

ひも

失いがたし。

御辺は腹あしき人なれば、火の燃ゆるがごと

いちじようひと

賺

しゆ

ことばやわ

し。一定人にすかさねなん。また主のうらうらと言和ら

たも

ひ

みず

おん渡

かにすかさね給うならば、火に水をかけたるように御わた

おぼ

りありぬと覚ゆ。

鍛

金

盛

ひ

い

疾

溶

そうろう

きたわぬかねは、さかななる火に入るればとくとけ候。

こおり

湯

い

つるぎ

たいか

い

氷をゆに入るるがごとし。剣なんどは、大火に入るれど

溶

鍛

ゆえ

もう

も、しばらくはとけず。これきたえる故なり。まえにこう申

すはきたうなるべし。

ぶつぼう

もう

どうり

どうり

もう

しゅ

か

仏法と申すは道理なり。道理と申すは主に勝つものなり。

愛

離

おも

妻

いかにいとおしはなれじと思うめなれども、死しぬれば

甲斐

しよりよう

惜

思

し

かいなし。いかに所領をおししとおぼすとも、死しては

たにん

もの

栄

としひさ

お

他人の物。すでにさかえて年久し。すこしも惜しむことな

前

々

もう

ひやくせんまん

かれ。またさきざき申すがごとく、さきざきよりも百千万

おくばいごようじん

億倍御用心あるべし。

にちれん

わか

こんじよう

祈

ほとけ

成

日蓮は少きより今生のいのりなし。ただ仏にならんと

思

との

おんこと

隙

おもうばかりなり。されども、殿の御事をば、ひまなく

ほけきよう　しやかぶつ　につてん　もう

法華經・釈迦仏・日天に申すなり。その故は、法華經の命

つ　ひと　おも

を継ぐ人なればと思うなり。あなかしこ、あなかしこ。あら

粗

わ　や　ひと　よ　あ

かるべからず。吾が家にあらずんば、人に寄り合うことな

よめぐ　とのぼら　頼

かれ。また夜廻りの殿原は、ひとりもたのもしきことはな

ほけきよう　ゆえ　やしき　と　ひとびと

けれども、法華經の故に屋敷を取られたる人々なり。常は

睦　たも　よる　ようじん　もう　との

むつばせ給うべし。また夜の用心のためと申し、かたがた殿

まも　わ　かた　ひとびと　しょうしょう　こと　見

の守りとなるべし。吾が方の人々をば少々の事をばみず

聞

きかずあるべし。

ほうもん　き　おお　そうら　よろこ

さてまた、法門などを聞かばやと仰せ候わんに、悦ん

まみ たも

で見え給うべからず。「いかんが候わんずらん、御弟子ど

そちら

みでし

もう

みそちら

柔々

もに申してこそ見候わめ」と、やわやわとあるべし。いか

色

あらわ

おぼ

き

おも

こころ

にもうれしさにいろに顕れなんと覚え、聞かんとする心

っ

たも

ひ

燃

てん

だにも付かせ給うならば、火をつけてもすがごとく、天よ

あめ

ふ

ばんじ

捨

り雨の下るがごとく、万事をすてられんずるなり。

こんど

たよ

しゅつたい

認

そちら

また今度いかなる便りも出来せば、したため候いし

ちんじよう

あ

だいじ

ふみ

一

騷

陳状を上げらるべし。大事の文なれば、ひとさわぎは

必

かならずあるべし。あなかしこ、あなかしこ。

にちれん

かおう

日蓮

花押

しじょうきんごどの
四條金吾殿